2024（令和６）年度

２日［＊＊］

国　　語

注　意

1. 開始の合図があるまでは、開かないこと。試験時間は、六十分である。
2. 問題は声を出して読まないこと。
3. 問題用紙は二十四ページ、一、二 の二題から成っている。
4. 問題用紙および解答用紙に、落丁、乱丁、汚損あるいは印刷不鮮明の箇所などがあれば、手をあげて監督者に申し出ること。ただし、**内容に関する質問は受けつけない**。
5. 解答は必ず**黒色鉛筆を使用し、解答用紙に記入すること**。
6. 解答はすべてマーク式の解答欄①②……を丁寧に塗って解答すること。
7. 訂正箇所は、消しゴムで**完全に消すこと**。
8. 解答に関係のない符号（？レなど）や文字は記入しないこと。
9. 解答用紙を**折ったり、汚したりしないこと**。

一

以下は、アメリカの社会心理学者メラニー・ジョイが主張する肉食批判を取り上げ、それを検討した文章である。これを読んで、後の問に答えなさい。

あるテーマについて議論するにあたって、一方が普通ではない、つまりabnormalな考え方を持っているという a を貼られてしまうことによる(ア)エイキョウは大きい。建設的な意見交換のためにも、[注1]ビーガンを普通ではない人びととらえることは慎む必要がある。この目的のために、マジョリティの食習慣のみが普通だという前提を取り払おうという姿勢は支持されてよい。こうした姿勢が必要なのは、食についての議論に限ったことではない。たとえば性の多様性の議論においてもあてはまる。自身の生物学的な性と性自認が一致している男女の愛のみが普通であるという主張は、この条件に当てはまらない人びとやその関係を普通から逸脱したもの、異常なものとして抑圧したりハ(イ)イセキしたりする思考と表裏一体である。このような思考は、多様かつ平等な性のあり方、そして多様性と平等を社会の原理とすることを望むのであれば好ましいものではない。性の多様性を認めるということは、社会の片隅に異常性愛者のための居場所を用意してやるという傲慢な姿勢をとることではなく、私たちの性にはさまざまな普通があるという対等な立場から相互を認めることであるはずだ。同じことが食の習慣や文化についても言える。肉食は普通でないという主張や、[注2]「カーニズムを理解することはビーガンにとって有益である。ビーガンでない人びとに対する理解と思いやりを深めることになるからであり、コミュニケーションをとる相手の心理について理解するだけ、いっそう私たちは効果的にビーガニズムについてコミュニケーションすることができる」という記述も、この文脈で理解されるのであれば有意義なものだろう。

しかし、ジョイの筆致は肉食を是とする姿勢のみが普通という考えを批判する段階を踏み超え、文字通りに肉食を異常な行為と見なしていると思わせることがある。彼女は「ビーガンはまた過剰に感情的（それゆえに、道理が通じない）な存在として描かれることが多い」と b 一方で、カーニズムやネオカーニズムに言及するさいには「筋の通らない議論」であるとか「不合理で、ケアの欠如した慣習」として、全面的に退けてしまっている。ここにおいて、「ビーガンでない人びとに

対する理解と思いやりを深める」と言うジョイが想定しているのは、意見は異なれど対等な立場のもの同士のコミュニケーションというよりは、見えざる信念体系であるカーニズムを認識し、「深遠な意識のシフト」を果たしているビーガンと、カーニズムの信念体系のうちに取り込まれたまま、いまだシフトを果たしていない者とのあいだのむしろ水平でないコミュニケーションだということが明らかになる。

もちろん、ジョイにも言い分はあるだろう。彼女の見解に従うなら、肉食者はカーニズムの信念体系によって「認知の歪(ゆが)み」をきたしているので、そうした人びとが下す肉食の是非についての判断を、合理的と見なすことはできないということになる。肉食者の「認知の歪み」を示す例として、ジョイは牛は食べるけれども子羊は食べないという肉食者や、動物を名前や個性をそなえた個体として見ては仕事ができないという肉切り職人のインタビューを提示する。つまり、人びとがある動物種は食の対象としておきながら、その他の動物種を食べようとしないこと、食の対象となっている動物を個性や性格をそなえた存在としてではなく［　I　］な客体としてとらえていること、これらをもって、肉食者は現実から目を背けていると判断しているのである。

だが、A本当にそうなのだろうか。どのような存在が食の対象であるか、あるいは道徳的配慮の対象であるかについて考えるとき、苦痛を感じる能力があるか否かといった一つの（あるいはその他若干の認知能力についての）基準で判断することは、どこまで適切なのだろう。私たちは原則的に人肉を食べないし、食べることを認めようとしない。たとえ食べられる人間の死が突然の発作などによるものであり、食べる側が直接的にも間接的にも危害を加えていないとしてもである。しかし、工場畜産における家畜の苦痛に心を痛めビーガンになることを検討している人も、危害を加えられずに死んだ動物の肉を食べることに対して、人肉を食べることを考えるときほどには心理的抵抗を感じないだろうし、そのような動物の肉を食べる人を道徳的に責めようとは思わないだろう（もちろん、実際には衛生面を考えれば、そのような動物の肉を食べる人はいないだろうが）。「いや、私は誰かに危害を加えられたのではないとしても、死んだ動物の肉を食べることは認めない」と考えるビーガンもいるだろうが、その場合は食べることを認めない根拠として、動物の感覚能力以外のものを提示する必要がある。

《　a　》わが身を振り返れば、肉食者が肉食を放棄しない理由には、肉の味を好むという食の嗜好や、慣れ親しんだ食習慣を変えたくないという怠惰な気質も含まれていることは否定しがたい。しかし、そうした理由とは別に、多くの人はビーガンが支持する苦痛や認知能力ばかりに依拠した基準に、道徳的な違和感をおぼえているからこそ、肉食への批判を受け入れなかったり反発したりしている面もあるのではないだろうか。それこそ人肉をふくめ特定の食物を忌避するという慣習や文化的伝統など、ジョイのカーニズム批判では倫理的価値を認められていない要素が、実際には食に限らず幅広い多様な文脈において、私たちの生きる意味や世界観を構成する要素となっているのである。

また、ジョイは講演や文章で、私たちがゴールデン・レトリーバーを食べないけれども豚を食べるという慣習を繰り返し取り上げているが、これも前述の点を考えると、どちらの生物も苦痛を感じるという一事をもって不合理だと断じることはできない。そればかりか、ジョイのこのレトリックは、欧米ではゴールデン・レトリーバーを食べることへの違和感や嫌悪感を倫理的なものとして感じる人が多いだろうという推測が成り立つ彼女自身の文化的背景に根差したものである。実際には犬肉を食べるという［　X　］可能性もあれば、豚を食べることを受け入れていることが問題なのではなく、ゴールデン・レトリーバーを食べないことに問題があるのかもしれないという視点を真摯に検討する姿勢がジョイにはあまり見られない。韓国や中国などで犬肉食の風習が残っていることを考えると（主に食べられているのはゴールデン・レトリーバーではないが）、彼女の姿勢には文化帝国主義的な匂いすら漂う。

《　b　》また屠畜に関わるものが食肉として処理される動物と個体として向き合っていないという批判[B]も、より慎重に行うべきである。個体として向き合えば、心理的負担が生じるので、そのように考えたくないという、ジョイがインタビューした肉切り職人の声はその通りだろう。畜産業者にしても、個体として愛着を抱いてしまえば心理的負担になりうるので、名前をつけず心理的に距離を置いて飼育するという面は確かにある。しかし、私たちは動物に限らず、お気に入りの存在に名前をつけることがあり、名前をつけた存在に危害を加えたり破壊したりすることをためらう傾向がある。植物や昆虫が受ける危害よりも動物が受ける危害に対して私たちが強く反応するのは、動物が持つ認知能力や感覚能力によるところが大きいだろうが、

それで全てが説明されるわけではない。また和牛生産業者のように個体の性質や特徴を把握し、名前をつけ、人間や伴侶動物に対するのとは違った種類の「愛情」を抱きつつ飼育し出荷する業者もいる。ジョイのカーニズム批判は、食肉に関わる人びとの多様な姿勢や心情の機微を取りこぼす目の粗いものであり、こうした職業に従事する人びとへの偏見を助長しかねない面がある。

《 c 》不自然なのは工場畜産であり、より持続的な畜産は自然なものであるとするエコカーニズムもジョイには受け入れがたいものであることはすでに述べた。「エコカーニズムは、人びとが動物を殺すのを忌避するのは近代の異常性を示すものであると主張する。すなわち、ビーガニズムは自然から切り離されて「軟弱に」なってしまった都市部や郊外のアッパー・ミドル階級の現代運動だと見られている」のに対して、実際には「他者を傷つけることへの感受性が高まっているのは、私たちが切り離されているからではなく、私たち自身の倫理や他者との結びつきがより強くなっているからだと思われる」とジョイはビーガニズムの自然性をヨウゴ(ウ)する。肉食がより自然との結びつきを強める（それも小売店から食肉を購入するよりも、自ら狩って殺すほうがより自然である）とする保守的なエコカーニズムに対しても、人びとの共感を弱めさせることを目的としており、殺人によりストレスを感じる兵士を軟弱な性格の持ち主と見なし、よりタフにキタ(エ)えあげようとする軍隊の心理療法の要綱を思い起こさせるというジョイの指摘には一理ある。しかし、動物の苦痛を根拠として肉食を否定する思想をつきつめた先にあるであろう、私たちと自然との新たな関係は、果たして「自然」なものなのだろうか。この問いに答えるとき、射程に収めるべきは私たちの食習慣の変化だけではない。なぜなら、動物の苦痛は人間によって引き起こされるものだけではないからである。

《 d 》動物倫理の議論では、道徳的行為者と道徳的被行為者の区別がよくしられている。私たちが動物に配慮したところで、動物は私たちに配慮してくれない。それならば、なぜ私たちは動物に配慮しなければならないのだろうか。そもそも肉食動物が他の動物を捕食しているのに、なぜ人間だけが動物を食べてはいけないという考えに至るのか。こうした疑問は、倫理学の受講生からもしばしば提出される。これに対する典型的な応答は以下のようなものである。すなわち、健常な成人は道

徳的行為者でもあり道徳的被行為者でもあるが、幼児や認知症患者、重度の知的障碍者のように、道徳的に振る舞うことが必ずしもできない人びともまた道徳的被行為者に含まれる。動物もまた道徳的に振る舞うことはできないが、だからといって［Y］、という次第である。この応答によって、肉食をやめるべきかどうかといった具体的な方針はさておき、道徳的配慮の対象に動物もふくまれることが示される。そして、この議論においては、肉食動物が肉を食べ続けるからといって責められるいわれはない。

《 e 》ところで、私たちは道徳的被行為者が何らかの理由により他者に危害を加えると判断したとき、その行動を制限することがある。それならば、動物への倫理的配慮を検討するにあたって、議論の対象を人間による動物への加害行為に絞るべき理由がどこにあるのだろう。私たちと動物の関係における倫理的側面を、おもに苦痛の増減という観点からとらえ、そして私たちに動物の行動を管理する能力があるとしたら、自然に見られる残酷さや危害の抑制もまた議論されるべきだということにはならないだろうか。

人間以外の動物が他の生物に危害を加えるのをやめさせるという考えは、実行可能性の面であまりにも［C］な話であるため、少数の論者をのぞいて真摯に議論されてこなかった。実際、昨今のゲノム編集技術の発展とその応用可能性（たとえば、遺伝子ドライブによる蚊の撲滅など）の広がりは著しいものがあるが、それでも肉食動物の生態をすべて、もしくは大幅に草食や果実食へと転換させることは難しいように思われる。また、たとえ可能になったとしても、肉食動物の消失と草食動物の激増による負荷を受け止められるよう生態系を支援するという難題が待ち構えている。そのため、当分は肉食動物をこの世界から消し去るという計画が実施されることはないだろう。だが、仮に肉食動物の消失が実現可能だとしたらこの計画をどのように受け止めたらよいのだろう。肉食動物が消えた世界は、伝統的な自然保護論者にとっては悪夢のような世界だろうが、肉食に反対するジョイのような論者にとっては望ましい世界だということになるのではないだろうか。

想定されるのは、肉食など動物に苦痛をもたらす行為を慎む私たち人間が、自然に［Ⅱ］の介入や、絶え間ない介入を繰り返すことで、自然界における苦痛をも削減しようとする未来像である。このような未来において、私たちと自然との

「結びつきがより強くなっている」ことは疑いようがない。しかし、このような状況を肉食という習慣を認めている現在と同等か、もしくはそれ以上に「自然」だと見なすのであれば、「人間および人間の手並みの明らかにうかがえるものを除いた全てのものを含む」ものという従来の自然概念は、根本的に再定義される必要があるだろう。

（熊坂元大「『普通』で『自然』な人間と動物の関係とは？」による。出題の都合上、一部中略した箇所がある。）

注

1 ビーガン――動物を食品として摂取することや製品として利用することを否定する人や立場のこと。

2 カーニズム――肉の消費を支持する立場のこと。肉食主義。

問一　傍線部**（ア）**～**（エ）**のカタカナを漢字に改めた場合、それと同じ漢字を含む選択肢を次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

（ア） エイキョウ

1 思わずエイタンの声をあげる
2 機械の復旧にエイイ努力する
3 主人公に自己をトウエイする
4 スズメが軒下にエイソウする
5 エイコ盛衰はこの世の摂理だ

(イ) ハイセキ

1 ショセキの校正を行う
2 物体間にセキリョクが働く
3 会社のギョウセキが下がる
4 犯行のケイセキが残される
5 一点差でセキハイする

(ウ) ヨウゴ

1 選挙の候補をヨウリツする
2 チュウヨウを理想に生きる
3 核心を突かれドウヨウする
4 食事でジョウをつける
5 火山からヨウガンが流れ出る

(エ) キタえ

1 辞書をタンネンに読む
2 トタンの苦しみを味わう
3 センタン医療を勉強する
4 コタンの境地に触れる
5 何十年もタンレンを積む

問二　空欄 a ～ c に入る語として最も適当なものを次の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

a
1　レッテル
2　色眼鏡
3　バイアス
4　烙印
5　フィルター

b
1　水をあける
2　同情を寄せる
3　折り紙をつける
4　色眼鏡で見る
5　苦言を呈する

c
1　我田引水
2　荒唐無稽
3　衆寡不敵
4　堅忍不抜
5　無為徒食

問三　空欄 Ⅰ ・ Ⅱ に入る語として最も適当なものを次の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

Ⅰ
1　理想的
2　動物的
3　象徴的
4　抽象的
5　有機的

Ⅱ
1　不得手
2　不可逆
3　不可避
4　不採算
5　不特定

問四　本文中の空欄《　a　》～《　e　》のうち、次の一文を入れる箇所として最も適当なものを後の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

続いて、肉食が「自然」ではないとする主張を検討してみよう。

1　a　　2　b　　3　c　　4　d　　5　e

問五　本文の第一段落（「あるテーマについて」～「有意義なものだろう。」）に関する説明として、最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　「性の多様性」という近年一般的に議論されている例を引くことで、あまりなじみのない「食の多様性」という議論に対する一般読者のハードルを下げようとしている

2　自らの議論が思想的に偏りのないことを明確にし、ビーガニズムとカーニズムを客観的に比較検討するため、一般に存在するビーガンに対する偏見を払拭しようとしている

3　穏当なビーガニズムが不当に扱われ、マジョリティの主張が幅を利かせている世間一般の風潮に警告を発し、以降の議論を少数派の立場から進めていくことを明確にしている

4　一方的にカーニズムを否定する行き過ぎたビーガニズムを批判する前提として、有意義なビーガニズムの主張を紹介することで、思想の多様性を認める立場を鮮明にしている

5　ビーガニズムに対するカーニズムからのあまりにも一方的な批判がジョイのような過激なカーニズム批判者を生んだことを暗に示し、以降の議論をビーガニズム支持の方向で進めようとしている

問六　傍線部A本当にそうなのだろうかとあるが、その説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　肉食者とのあいだでむしろ水平でないコミュニケーションがおこなわれているのではないだろうかということ
2　肉食者は肉を食の対象とすることについて動物の苦痛や認知能力のみを基準にしているのだろうかということ
3　肉食者批判の根拠として動物の認知能力を挙げることをジョイは十全なものと認めているのだろうかということ
4　肉食者であることは動物の苦痛や認知能力を考慮しないことを理由に批判されるべきことなのだろうかということ
5　「認知の歪み」をきたしているのは信念体系にとらわれている肉食者に限定されるのだろうかということ

問七　空欄 X ・ Y に入る表現として最も適当なものを次の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

X

1　アジアの食習慣もごく限られた一地域のものでしかないことを理解していない
2　食習慣は、欧米人がこれを正しく理解するにはあまりに非人道的なものである
3　行為を型破りなものと決めつけていることが問題だという認識を持っていない
4　行為を非道の例として挙げることに反発を覚える人々の存在を考慮していない
5　文化的に隔たりのある行為への生理的嫌悪感を倫理的なものとはき違えている

Y

1　道徳的行為者・被行為者の両方の要件を十分に満たしてはいない
2　人間がその肉を食うことを許されるのは草食動物には限られない
3　道徳的被行為者に該当しないとは限らないと考えることができる
4　肉食動物の食肉行為と人間のそれが同一の地平では論じられない
5　道徳的被行為者の行為であることを理由に批判されてはならない

問八　傍線部B 屠畜に関わるものが食肉として処理される動物と個体として向き合っていないという批判 とあるが、この批判に対する筆者の見解の説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　畜産業者に対する批判は過度な理想論であり、結果的に食肉産業に従事する人々への偏見を促す誤ったものである
2　さまざまな方法で屠畜に伴う心理的負担を軽減しようとしている畜産業者の努力を尊重したものとは言い難い
3　畜産業者の全体像やその背景にある種々の事情を把握しておらず、職業差別の誘因ともなるものである
4　畜産業者が食肉動物に名前を付けないことへの批判は、少数だがその慣行を辞めた人々の存在を見落としている
5　研究者という強者の立場からの食肉に関わる市井の人々への批判は、列強による植民地支配の愚の焼き写しである

問九　本文の内容と合致するものを、次の選択肢の中から二つ選び、その番号を答えなさい。

1　ジョイは肉食という多数派と、反肉食という少数派の議論は水平なコミュニケーションにはなりえないとしている
2　自身を自然から切り離されている存在と認識している都市部や郊外の人々が、ビーガンとなるのは自然なことである
3　肉食動物をこの世から消し去るという多くのビーガンが望む自然の改変は、近いうちに確実に訪れる未来像である
4　「何を肉食用の動物とするのか」という議論は、人間一般に通用する倫理や道徳にだけ依拠していては成立しない
5　動物に危害を加えず食肉用に加工する技術が可能になれば、ビーガニズムとカーニズムの論争は決着をみる
6　筆者はジョイのカーニズム批判の一部には首肯するという冷静さを保ちつつ、その一方的な議論を批判している

二

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

連帯は様々な文脈や領域において成立する。社会の成員たちのあいだに成立する紐帯（ちゅうたい）が社会的連帯であった。政治的連帯は、政治的大義のもとに人々が結合し、助け合うことを意味した。市民的連帯は、市民たちが福祉国家という制度を通じて支え合うことを意味した。いずれの場合も、連帯は、特定の社会、特定の政治状況、特定の福祉制度のもとで成立するものであった。ここで取り上げられる人間的連帯は、そのようなトクシュ（ア）な文脈を越えて成立する連帯である。人間的連帯は、国家、社会、政治集団といった特定の集団のなかで成立する連帯ではなく、人間あるいは人類という集団の内部で成立する連帯である。したがって、ショルツが述べるように、「人間的連帯の成員であるためには、ある人が人間であるということで十分である」。

人間的連帯の構想は、連帯論の歴史において必ずしも［　I　］ものではない。その系譜には、本書で取り上げられた連帯論も含まれる。たとえば、社会的連帯論の前史という文脈で言及したルルー、政治的連帯の文脈で考察したクロポトキン、さらにはキリスト教の連帯論――神の子ゆえの人類全体への愛としての連帯――も、人間的連帯の系譜に連なるだろう。また、ここでは詳しく触れないが、「すべての人格の連帯性」ゆえに、「各人の万人との倫理的な共同責任」が生じると説くマックス・シェーラーの「連帯性の原理」も人間的連帯の系譜に数え入れられる。

この人間的連帯という発想には様々な批判が向けられている。たとえばローティは、人間的連帯の構想を形而上学であるとして批判した。また、連帯概念を復興しようと企てるバイヤーツやショルツでさえ、人間的連帯に関してはカイギ（イ）的である。二人が指摘するのは、人間的連帯が直面する外的な困難である。小規模の集団においては、たしかに人間たちのあいだに連帯が成立する。しかし、人類の歴史が証言しているように、大きな規模では敵対や対立が人類にとっての常態ではなかったか。現在も状況は変わっていない。戦争、ジェノサイドといった現実から人間はいまだ抜け出していない。そうだとすると、人類の歴史を性格づけているのは連帯ではなく、むしろ対立あるいは分断なのではないか。そのような疑念が生じるというのであ

る。

さらに、ショルツは、「人間」という概念に批判的な視線を向けてもいる。人間的連帯は、人間であるというだけで成立する普遍的な連帯である。しかし、誰が「人間」と見なされるのかという問題が生じる。というのも、文化や伝統が異なれば、「人間」に数え入れるものが変わるという現実があるからである。女性を財産と同程度にしか見ない文化があるかもしれないし、子どもは大人に支配されて当然だと見なす文化もあるかもしれない。あるいは、ある社会集団のマイノリティは差別され抑圧されても当然だと考えられているかもしれない。これらの存在が「人間」に数え入れられない可能性が、この世界にはいまだに存在している。

人間的連帯に関するリスクは、すべての人間の道徳的尊厳を包含し、促進しようという試みそのものにおいて、誰かが排除されることになる、ということである――それが女性であれ、別のマイノリティであれ、抑圧された集団であれ。それらの集団の社会的に構築されたアイデンティティのせいで、それらの集団は、人間という地位のための基準を満たすのにどういうわけか失敗するものとして際立たせられるのである。

このような「人間」からの排除の可能性が存在しているかぎり、すべての「人間」を対象とするという理由だけで、人間的連帯は普遍的で包括的であると主張することはできないことになる。かりに人間的連帯が成立したとしても、そこから数多くの人間たちが排除されることが避けがたいのであれば、A人間的連帯は一種の詐称であることになろう。

次に、人間的連帯は内的困難によっても阻害される。この困難が内的と呼ばれるのは、それが連帯を連帯として存在させる条件そのものに関わる困難、あるいは連帯の構造そのものに内在する困難だからである。バイヤーツは、積極的義務の負担の重さと、共感の限定性という二つの問題を挙げている。まず積極的義務の問題から見てみる。

積極的義務の問題を理解するためには、まずは積極的義務とは何かを知る必要がある。義務の分類には幾つかの種類がある

が、消極的義務と積極的義務という分類が一般的である。消極的義務は、他者に危害を加えることを禁じる義務である。この義務は、危害を加えるのを控えることで実現されると一般に考えられるから、消極的義務を遂行する者の負担は小さいと言われる。また、他者がどのような他者であれ、他者に危害を加えることは禁じられると一般に考えられるから、消極的義務は普遍的であると言われている。一方で、積極的義務は、他者の利益となるよう何かを行う義務である。積極的義務は、他者のために労力や時間や資源を提供することを要求するので、積極的義務を遂行する者たちの負担は大きくなると言われる。また、その重い負担のゆえに、積極的義務が適用される範囲は狭いと言われる。

連帯する者たちは互いに義務を負う。この義務には消極的義務も積極的義務も含まれる。消極的義務が含まれることは当然のことだろう。なぜなら、連帯する者たちも傷つけ合ってはならないからである。しかし、加害の禁止は連帯する者たちだけに妥当する義務ではない。したがって、消極的義務と連帯との関連は希薄であるという考えも成り立つ。

とすると、積極的義務の方が連帯に密着した義務として際立つことになろう。分かりやすいのは政治的連帯である。政治的連帯は、連帯する者たちに三つの義務（協力、社会批判、直接行動）を課すのであった。しかし、政治的連帯に関与しない者たちに、そのような義務が課されることはない。それゆえ、連帯が呼び起こす義務のうち[B]積極的義務の方が、連帯に特徴的であることになる。しかし、通念によれば、積極的義務は重い負担を課すとされる。このような重い負担を伴う積極的義務は、人類全体へと拡張することが可能なのだろうか。人類全体のために重い負担を引き受ける義務は誰にもないのではないか。このような疑念から、連帯を人類全体に拡大することは困難であるという主張が導かれることになる。

バイヤーツは、もう一つの問題として共感の限定性を挙げている。バイヤーツは、デイヴィッド・ヒュームを援用する。ヒュームは、その『人間本性論』において、人間の関心の構造を同心円的に説明している。この関心の同心円の中心には個人が位置し、この中心から離れてゆくにつれて、関心は弱くなってゆく。ヒュームによれば、「われわれの精神の本来の成り立ちでは、最大の関心は自分自身に限られ、次いで強い関心が縁者や知人にも広げられる」が、「見知らぬ人や、関係のない人に[ウ]まで及ぶのは、最低の程度の関心だけ」である。このような意味で、他者への関心、他者への愛着には、「偏り」や「不キン

トウ」が存在する。それゆえ、「一般的に言って、個人の性質にも、能力にも、われわれ自身との関係にもよらない、単にそのものとしての人間一般への愛などという情念は、人間の精神のうちに存在しないと断言してよい」。

そうであるとしたら、人間的連帯もまた不可能であることになる。遠くの見知らぬ者たちに対して強い関心をもつことができない以上、そうした者たちと結びつき、支え合おうとする動機が生まれないからである。したがって、もし連帯が成立するとすれば、もっと小さなスケールにおいてであろう。「人は、なんらかの共通の根拠にもとづいて、すなわち共有された歴史、共有された感情や確信や利益にもとづいて、身近な者たちと「連帯する」」。このことが正しいとすれば、それは、「連帯という語の［X］」であることになろう。

それでは、人間的連帯という概念に居場所はないのだろうか。人間的連帯を別の種類の連帯の下位区分として位置づけるショルツ流の仕方で、人間的連帯に存在の余地を残すこともできる。

人間的連帯は、それが持ち出される意図に応じて変化し、社会的連帯のサブカテゴリーとして最もよく理解される。すなわち、それは共有された属性ないし特徴によって結束された人間全員の社会的連帯である。さもなければ、人間的連帯は、国際共同体の成員を保護したり、世界のもっとも脆弱な者たちを援助したりすることに関与する国際共同体の成員全員の結束として、市民的連帯である。

グローバル化した今日の世界においては、人間的連帯が成立していると思わせる場面が出現することがある。しかし、そのような場面で人間的連帯だと思われるものは、他の種類の連帯の範囲が拡大したものにすぎない。したがって、人間的連帯は他の種類の連帯の下位区分として理解するのがよいというのである。まず、人間的連帯は、社会的連帯の下位区分として理解することができる。社会的連帯は、共通の特徴によって結びついた者たちのあいだで成立する連帯であった。たとえば、今日のグローバル経済を考えてみよう。グローバル経済は、可能性としては、グローバルな分業システムを通じてすべての人間を

結合し、大きな連帯を成立させるかもしれない。このようにして成立する連帯は、しかし人間的連帯ではない。あくまでも、グローバル経済の担い手という共通の特徴によって成立する連帯である以上、それが広範囲で人間を包摂するものであるとしても、それは社会的連帯である。ここには、人間であるという単純な事実によって成立する普遍的な人間的連帯とは異なるメカニズムが働いているのである。

次に、人間的連帯は市民的連帯の下位区分として理解することができる。たとえば、グローバルな貧困問題を解決するために、人々が異国の貧困者の支援に取り組むことは人間的連帯であるかのように見える。しかし、これは規模が拡大した市民的連帯として理解すべきである。市民的連帯は、ある集団の成員たちが、相互に、そしてとりわけもっとも脆弱な者たちのために、その最低限の生活水準を保障するよう協力することであった。グローバルな貧困問題に取り組むことは、この市民的連帯が地球規模に拡大したものにすぎない。このようにして、ショルツは、C人間的連帯の居場所を確保する。だが、その固有の身分を奪うことによって、そうするのである。

バイヤーツの批判、つまり連帯の領域を人間全体へと拡大することは重い負担や関心の限界のゆえに不可能であるという批判には、かなりの説得力がある。また、今日のグローバル化した世界において、まさに人間的連帯であると思われたものが、実際には規模が拡大された他の種類の連帯であるというショルツの指摘も、事柄の一面を正確に捉えたものであろう。とくにショルツの場合、［Y］世界規模の連帯現象を理解することが可能になるから、人間的連帯という概念は無用であるという結論も導くことができるかもしれない。

とはいえ、人間が人間であるがゆえに連帯するという人間的連帯の発想は、この種の批判によって葬られてもよいのだろうか。たしかに、人間的連帯は実現不可能で不要な一個のユートピアであるかもしれない。そうだとしても、連帯という概念そのものには、連帯の境界線を拡大し、人間的連帯へと突き進んでゆく内的な傾向があるとも言える。人間的連帯が究極的には不可能な構想であるとしても、連帯の極点(い)としての人間的連帯の姿を描いてみることは、連帯論の［Ⅱ］課題として残されているように思われる。

（馬渕浩二『連帯論　分かち合いの論理と倫理』による。出題の都合上、一部中略した箇所がある。）

問一　傍線部（ア）～（ウ）のカタカナを漢字に改めた場合、それと同じ漢字を含む選択肢を次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

（ア）トクシュ

1　シュユの間に姿を消した
2　シュコウをこらした創作物
3　訂正すべくシュヒツを入れる
4　シュギョクの短編小説を読む
5　シュショウな心がけをほめる

（イ）カイギ

1　国家全土にゲンカイ体制をしく
2　過去の事件をジュッカイする
3　キカイな噂話を耳にする
4　カイショ体で正確に記入する
5　ゴウカイなフォームで投げる

（ウ）キントウ

1　キンゲンとして覚えておく
2　読み手のキンセンに触れる
3　同僚に自著をキンテイする
4　ヘイキンダイで体操をする
5　キッキンの課題に対応する

問二　空欄 Ⅰ ・ Ⅱ に入る語として最も適当なものを次の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

1　古風な　　2　稀有な　　3　一様な　　4　個別な
5　高尚な　　6　正当な　　7　不一な　　8　必定な

問三　傍線部（あ）・（い）の本文中の意味として最も適当なものを次の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

（あ）形而上学である

1　享楽的である
2　内向的である
3　空想的である
4　限定的である
5　皮相的である

（い）極点

1　最終的に達する段階
2　最も難解である問題
3　理想だが実現不可能な姿
4　理論上存在する地点
5　想像が及ぶ限りの次元

問四　傍線部A人間的連帯は一種の詐称であることになろうとあるが、「人間的連帯」を「詐称」と言っているのはなぜか。その説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　「人間的連帯」のすべての「人間」を対象に捉えるという見方が、例外的な集団を完全に排除し少数派に追い込むという矛盾を抱えているから

2　「人間的連帯」は、「人間」であればよいという達成容易に見える条件を掲げながら、「人間とは何か」という難解な問いを突き付けてくるから

3　「人間的連帯」の「人間」に数え入れるものを文化や伝統によって見定めるという方法が、文化の多様性をうたう一部の人々を疎外するから

4　「人間的連帯」は、「人間」の定義を道徳的な水準に求め、個々にアイデンティティを築いてきた集団を恣意的に切り捨てようとするものだから

5　「人間的連帯」の「人間」というあたかも包括的に聞こえる概念が、現実には何らかの基準によって集団をふるいにかける可能性があるから

問五　傍線部B 積極的義務の方が、連帯に特徴的である とあるが、その説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　他人の利益のために行う義務のほうが、対象となる人々が限られるために連帯をより強固なものにするということ
2　適用範囲が狭い義務のほうが、連帯によりその必要性が求められるという点で連帯との親和性が高いということ
3　他人を自ら進んで助けようとする義務のほうが、連帯の利他的な側面を本質的に捉えているものであるということ
4　関係者のみに働きかける義務のほうが確実な効果が期待でき、連帯においてしばしば行われるものだということ
5　人類全体には拡大困難な義務のほうが負担が大きい分、連帯を語る上でかえって真実味が感じられるということ

問六　空欄 X ・ Y に入る表現として最も適当なものを次の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

X

1　博愛主義的な捉え方を肯定する理論
2　恣意的な転用に向けた異議申し立て
3　普遍主義的用法に対する重大な反論
4　全世界への適用に向けた新たな課題
5　一元論的な捉え方に対する問題提起

Y

1　人間的連帯の要素を敷衍しさえすれば
2　人間的連帯と社会的連帯を対比することで
3　人間的連帯をグローバルに捉えずとも
4　人間的連帯の範囲を意図的に拡大することで
5　人間的連帯という概念に訴えなくとも

問七　傍線部C 人間的連帯の居場所を確保する とは、どうすることを言うのか。その説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　さまざまな連帯を、人間的連帯を縮小したものにすぎないと見ることによって、それらの独自性を否定しつつも、一つのカテゴリーとして存在する余地を与えること

2　特定のコミュニティにおける連帯を水平拡大したものが人間的連帯であると見ることによって、人間的連帯の普遍性を強調し、その存在意義に可能性を見いだすこと

3　あらゆる連帯は人間的連帯から派生したものと見ることによって、人間的連帯という範疇自体に重要な意味はないとしながら、ルーツとしての意味を指摘すること

4　実際のそれぞれの場面において、人間的連帯を社会的連帯や市民的連帯の下位区分として理解することによって、連帯の一つとしてその存在が認められること

5　人間的連帯を、すべての連帯の下位区分として見ることによって、それらの連帯を網羅的に表現できるというあくまで便宜的な理由から、呼称だけを残しておくこと

問八　本文の内容と合致するものを、次の選択肢の中から二つ選び、その番号を答えなさい。

1　人間的連帯には、連帯それ自体の性質による問題に加え、連帯が機能しうる範囲や対象による外的な問題も横たわる

2　家族的な連帯が存在したとして、「相手を傷つけてはならない」義務は、家族外の人々に対し適用されることはない

3　連帯と消極的義務とは、他者へ関与するものと他者からの干渉を避けるものという真逆の性質であって、結びつきが弱いといえる

4　筆者は、世界規模の連帯について考えるうえで、人間的連帯という考え方は一概に必要なものではないと思っている

5　人間的連帯の実現は容易でないが、連帯に自己の領域を外へと押し広げていく性質が備わっている点は無視できない

6　バイヤーツやショルツの見解を批判的に乗り越えることによってしか、連帯論に残された課題に取り組む方法はない

国語解答用紙　2日［＊＊］

一

問一	
(ア)	①②●④⑤
(イ)	①●③④⑤
(ウ)	●②③④⑤
(エ)	①②③④●
問二	
a	●②③④⑤
b	①②③④●
c	①●③④⑤
問三	
Ⅰ	①②③●⑤
Ⅱ	①●③④⑤
問四	①②●④⑤
問五	①②③●⑤
問六	①②③●⑤
問七	
X	①②③④●
Y	①②●④⑤
問八	①②●④⑤
問九	①②③●⑤●

54点

二

問一	
(ア)	①②③④●
(イ)	①●③④⑤
(ウ)	①②③●⑤
問二	
Ⅰ	①●③④⑤⑥⑦⑧
Ⅱ	①②③④⑤●⑦⑧
問三	
(あ)	①②●④⑤
(い)	●②③④⑤
問四	①②③④●
問五	①●③④⑤
問六	
X	①②●④⑤
Y	①②③④●
問七	①②③●⑤
問八	●②③④●⑥

46点